

「生活の発見会」における「共同体の物語」と「回復」をめぐって

浜松学院大学 櫻井龍彦

1 目的

「生活の発見会」（以下、「発見会」と略記）は、森田正馬が大正期に考案した森田療法を基盤とする、神経症のための自助グループである。本報告では、森田療法と発見会がもたらす、一般的な意味での回復とは趣を異にする独特の「回復」のあり方をふまえながら、「回復」を可能にする自己物語の条件と、「回復」に対して社会学がなしうる貢献について検討することを目的とする。

2 方法

これまで私は、発見会での活動によって「回復」を果たした人々に対するインタビュー調査と、発見会の活動に関するフィールド調査に取り組んできた。本報告では、こうした調査で収集されたデータと、伊藤智樹（2008; 2009）やJ. Rappaport（1993）の知見を主な手がかりとして考察をおこなった。

3 結果

上述の通り、発見会は森田療法を基盤とする自助グループであり、したがって、森田療法についてきちんと学習し、理解すれば神経症から「回復」することができるという物語が、発見会において頻繁に語られる公的な物語、すなわち Rappaport のいう「共同体の物語」となっている。そしてまた、発見会での活動によって「回復」を果たした人々は、森田療法について詳細な知識や深い理解を持っていることも確かである。しかし興味深いことに、「回復」した人々の中には、森田療法の枠組みでは処理できない問題もあったと述べる人々がしばしばみられる。そしてそうした人々は、「回復」に至るためには、森田療法についての知識に加えて、独学で身につけた他の知識（たとえば認知行動療法や仏教思想の知識など）も不可欠であったと述べるのである。

4 結論

以上をふまえれば、「回復」は、共同体の物語を身につけさえすれば達成されるというようなものではないことになる。それは、一人ひとりの個人が、共同体の物語を重要な資源の一つとして活用しながらも、必要に応じてそれ以外のさまざまな物語的資源をも活用して、自らが抱えている不安や悩みをうまく処理することのできるような、自らに固有の物語を産出することができたときにはじめて達成されるのである。このような、共同体の物語に回収されない部分は、発見会の活動においてはほとんど意識されていないように見える。そしてだからこそ、そうした部分を丁寧に記述していくことで、社会学は「回復」に対して重要な貢献をなしうるように思われるのである。

文献

伊藤智樹, 2008, 「語り手に『なっていく』ということ」崎山治男・伊藤智樹・佐藤恵・三井さよ編『〈支援〉の社会学——現場に向き合う思考』青弓社.

———, 2009, 『セルフヘルプ・グループの自己物語論——アルコールリズムと死別体験を例に』ハーベスト社.

Rappaport, Julian, 1993, "Narratives Studies, Personal Stories, and Identity: Transformation in the Mutual Help Context," *The Journal of Applied Behavioral Science* 29(2): 239-56.